閾 -ヴェルフリ-

メタデータ	言語: jpn 出版者: 明治大学教養論集刊行会 公開日: 2017-05-31 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 須永, 恒雄 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/18695

明治大学教養論集　通巻523号
（2017・1）pp. 29-37

閾 ― ヴェルフリ

須　永　恆　雄

だってそれは神意だから：
幸せは消え去らざるを得ない！
そして森で鳴くのは，蟋蟀：
何もかにもが煤の中に落ちる。
恋人がぼくを鎮まらせてくれない！
やだ！ やだ！ やだ！ やだ！ やだ！
だって，ぼくはしなければならないから！
だってそれは神意だから：
幸せは消え去ら，ざるを得ない。[*1]

（vdWbzG）

これは少女陵辱を咎められて裁判にかけられ，統合失調症ゆえに責任能力無し，との判決を受け，しかし公安妨害の危険有りとして施設に収容され，以来三〇年ほどにわたる収容所療養生活に於て生まれた膨大な絵物語の一節であるが，現代ドイツの作曲家リームが，六つのヴェルフリの詩に作曲して七つめは，― ad libitum ―と題した歌詞無しの器楽のみの後奏を付した，都合七部分からなる《ヴェルフリ歌曲集》の六つめ即ち，歌詞のついた曲としては集中の最後に置かれている（Gartmann）。

どこかで見た覚えのある情景，と既視感に誘われるが，はてさてそんな見覚

えのあるものとして脳裡に浮かぶのは次の数行，

マリー：
なんて真っ赤に月が上がるのかしら！
ヴォツェック：
まるで血まみれの刃物だな！
（ナイフを抜く）
マリー：
なに震えてんのよ？
（跳び上がり）
なにすんの？
ヴォツェック：
俺には出来ないんだ，マリー！　だから他のどいつにだってさせてなるもんか！
（掴みかかって喉に刃を突き刺し）
マリー：
助けてえ！
（頽れる。ヴォツェックが彼女の上に身を屈める。彼女は死ぬ。）
ヴォツェック：
死んだ！[*2]

周知ヴォツェックのクライマックスであるが，奇しくも同じく法的責任能力無しの精神錯乱状態を疑われて，ひとしきり医学界でも話題となり喧々諤々，裁判にも精神病理学的立場と法医学的立場から様々の見解が示されて審理に手間取るものの，結局こちらは責任能力を無理矢理着せられて公開処刑の憂き目をみる。
方や森陰に鳴く蟋蟀，方や血の色に赤く上った月，と双方とも一片の自然を

配して，神の定めた悲運の凶行の場面である。

前者，墓碑銘と題されたこの詩は，絵の中の文字，あるいは多彩な装飾文様に飾られた文書の頁の行文で，すなわちヴェルフリの詩画集『揺り籠から墓場まで』第5帖に収める画面の中に描かれ記されたものである。アール・ブリュットの先駆をなすアドルフ・ヴェルフリは先ずは画家として通っているが，担当医から画才を認められて，その作品が評判となったところから世に知られることとなった。単発の個々の作品として蒐集家の手に渡った創作物は，療養生活の続行と共に作者自身によって身辺に蓄えられて，やがて綿密な収集整理の作業を施されて「帖」となり，それを集めて大部の「書」となり，連綿とその作業が繰り返されて膨大な作品全集的集積を成すに至る。その間，編集者でもある作者自身が制作時の時系列に飽き足らず編集作業に拠って配列変更を加えたりもしているが，その都度の几帳面な数字の記入によって元来の創作順序は再構成可能であるという。

あらためてこの詩の題名であるが，作者の細心入念な記述を辿れば，「墓＝碑銘。1,868」原語では Graab＝Inschrift. 1,868 となる。刻印された4桁の数字は年号のつもりであろうか，もしそうであるとすれば作者4歳当時に当たる。すなわちアドルフ・ヴェルフリは1864年2月29日，とはつまり閏年の4年に一度しかめぐって来ない日付を誕生日として，「貧しい零落した両親」の許にスイス，ボーヴィルはニュヒテルンに生を享けた。物心ついた時には祖父母はなくしたがってその記憶もなく，父は石工を生業としたが国中をあちこち渡り歩く風来坊だった。素面で上機嫌なら，親方から授かった仕事をこの上なく迅速に仕上げることができた。というのも「頭はよかったからです」。しかし俸給を手にすると酒に溺れて女郎屋にしけこんだから，家で稼ぎ手を当てにして待っている母や哀れな子供らのことなどどこかに吹っ飛んでしまったのである。ヴェルフリは男ばかりの7人兄弟の末っ子で，女の兄弟はなかった。母は女手一つで皆を育てることは叶わず，子供の頃に兄

弟の内の二人はすでに死んでしまって，残りの5人も施設に預けなければならなかった，という。これは1895年にアドルフが草した簡略な履歴書に記されている内容であるが，この書類を作成するに至った経緯こそ，先に引いた詩の主題とまさに関係することであった。

1895年の5月12日にヴェルフリは，三歳半の少女への強姦未遂の現場を少女の両親に見つかって警察に突き出されるという事件を引き起こす。そのおよそ20日後の，6月3日にヴァルダウの施設に於て精神状態の鑑定を受け，同8日に精神病のため法的責任を負うべくもないことが認められたことになる。のみならず公安妨害の恐れありとも認定される。それに基づき法的措置として，同年10月23日に施設に収監ならぬ収容されることとなった。引用した2番目の歌詞のモデルとなったヴォイツェックの場合に比べると雲泥の違いの早さではあるが，時代と場所の然らしむるところのみならず，鬘師として世に生業を得て活動していた常人と，すでに31年の齢を重ねていたにせよ多少精神に変調のあることをあるいは周囲から認められていた要注意人物との違いかもしれない。大人同士の痴情の縺れとは異なる問題が誰の目にも明らかであったということか。精神病院施設への収容期間は，「精神病が治癒するか或いは公共の安全がもやは危険に曝されなくなる」まで，とされた。

なお，先の簡略な履歴書は全部で19頁にわたるもので，ヴェルフリの精神鑑定の為に医者たちの求めに応じてヴァルダウの施設への収容に際して作成された次第である（＝Württemberg. Beilage)。

ヴェルフリの詩が書きこまれた絵は，『揺り籠から墓場まで』第5帖第251頁にあるが，年号の1868という数字はアラビア数字のみならず，詩の下に恰も梁のように頁を横切って渡された線に挟まれて「上記の者」と署名もどきに記された後に続けて掲げられたローマ数字として反復されている。まさしくそれは紙に書かれた字というより，石材に彫りつけられた文字，すなわ

ち碑銘にふさわしい書体を具えている。右手に枠をなすように2羽の鸚哥を思わせる鳥が青赤上下に連なってこれまた枠をなすように詩を縁取ると，ローマ数字の帯の下には，おそらくは「墓＝碑銘。1868」についてのいささか意味不分明な註釈らしき文言，つまりはそれを赤字で刻印印刷するようにとの指示が2行ほど並べられて終わる文章スペース。それを下から限る図柄として，縦長楕円のそれ自体の上にも文字を連ねた赤い額縁に縁取られて抱き合う男女はたまた少女を抱きかかえる男との絵と，それを右手外側から見遣りつつ木の枝を差し出し差し込む煤色の男のなにやら禍々しげな影が配されている。三つ叉に分かれた木の枝はひょっとするとペニスの変容したものかもしれない。それなら赤い縁取りの楕円はヴァギナか。こう述べ乍らも，図像を文章で辿ることの困難と無意味とを嘆かざるを得ないが，ヴェルフリの「絵」はじつに図と字とが多様多重に入り組んで絵は果たして挿絵なのか，字は果たして吹き出しなのか定かでない混淆を形作る。相互に地と柄が入れ替わりそうになるどころか，柄そのものがつまりは字そのものが自ら絵と化して柄の役割を分捕りかねない。独自の象形文字の境地を醸成していると言おうか（Th. Gartmann. S. 35 及び vdWbzG. Bd. 1. S. 661, Bd. 2. S. 74)。無量の時間を，夥しい精力，を注ぎ込んで為し得たヴェルフリの創作に，ある程度まで，もしくは可成り厳密に，統一的に用いられているその反復する類型を整理してみたくなるのも頷ける（Kestner. S. 50ff.)。

1868年という年号についてあらためて思うことは，もしそれがヴェルフリの同年の誕生日2月29日より前に想定されているなら，ヴェルフリの3歳半とはいかないまでも95年に錯乱した愛情の対象となった相手の少女の年齢とほぼ等しくなることだ。すなわちここで「ぼく」が「しなければならない」凶行の対象となってしまった「恋人」は当年とってのヴェルフリの年齢である。凌辱は未遂に終わったものの，また凌辱即ち殺人ではないものの，この詩の中では禍々しい殺戮の現場が描かれている，少なくともそのような殺戮を犯したという強烈な印象の衝撃が，この詩を発現させた。犯された相

手の年齢の自分自身を，相手にあてはめ，相手に成り代わり，すなわち自ら恋人と成り代わってこそ，免れられない神意の殺生たる所以である。ここでヴェルフリは一旦生涯を終えることとなった，その記憶すべき年号といういうべきか。発病の年を自らの第一の生涯が終わり，その屍の骨と皮から今の自分が作り直されたと考えているという精神病者のはなしを思い出すが（ウィーン近傍はクロスターノイブルクの芸術療法施設グッギングの患者であった画家フィッシャー），この事件の前後でヴェルフリの場合もその人生環境は一変したと察せられる。

この頁すなわちヴェルフリの膨大な全作品の第1書『揺りかごから墓場まで』は1908年から1912年にかけて成立したとされる，その第5帖，この第251頁近辺には1910年との記入がみえるが，したがって15年前の出来事に当たる。この几帳面な年号の記入は，スイス現代の作曲家ホリガーの『スカルダネッリ』連作で，印象的に各部分の終わりを刻印するように告げられる年号にも通じるものがあるが，こちらは「塔の住人」として後半生を半ば幽閉状態のもとに送った精神の闇に閉ざされたヘルダーリーン晩年の詩を歌詞に用いた，その各篇をスカルダネッリの署名とともに綴じるのが，不可解なあるいは不条理な年号である。不条理というのは作者の生涯のはるか後代に属するものまでを含む埒もない数字即ちあり得ない架空の数字のことで，ゴーゴリの狂人日記にも同様の例がみられる。

時はそこで以前の坦々たる流れに楔を打込まれ刻み目をつけられる。いわば傷を負って，一旦死んで滅び，以後に再び流れ始めるならそれは別の生の時ということになろうか。振り返って遡航すれば嘗ての自分に再会するがその自分はおそらく後ろ向きの顔のない自分かも知れない。墓碑銘に固定されたその傷のしるしとして。

ここで既視感を誘うよすがともなったヴォツェックの場面を顧みると，宵の徒然の逍遙に連れ出したとみせて，沼のほとりにさしかかると，そこはかと

なく漂う不穏な雰囲気に怯えるマリーは，気散じどころではなくひたすら先を急ぎたい，今を遣り過ごしたい一念で，そこを左に行けば町だからと相手をせかすが，方や相方ヴォツェックはすでにここで常の時すなわち今まで流れていた時に始末をつけたい。それに切れ目を入れる刃物を密かに用意してきたから，マリーとは別のつもりで心ここにあらず，今の時に先のないことを匂わすような言葉を漏らす。やおら，馴れ初めてこれまでの経緯を共に味わい直すような台詞を吐くが，いきおい時を表す名辞が二人の間に並べられる。まさに刻印として。

時間が別のものに入れ替わるならばマリーももやはマリーであることを許されない。在ることを許されない，その理由は，別のマリーとして在り続けることを許さないということに他ならない。今までのマリーとして接吻を交わすことが以後許されないならば，誰にもそれを許すまい，マリーその人の存続を許すまい。俺には許されない，マリー！　だったら他の誰にも許すものか！

しかしマリー在っての物種。存在の絆としてのマリーを亡き者にすることはとりもなおさず自らの命を絶つことにほかならない。その後のヴォツェックのことはすでに語られる由もないが，あるいは殺害後の一時の狂乱の躁状態もまた一種の死の踊りかもしれない。あるいは残された孤児が以後の生を示唆するのか。反童話の独り取り残された，帰還したらそもそも拠って立つ大地がなくなっていた子供のように。

ヴェルフリの膨大な遺産を丹念に解読してそこに開陳される物語を読み取る作業が営々と続行されているようだが，その研究作業労働の中心に立つエルカ・シュペッリの作成した，ヴェルフリの実人生とそれを反映する作品の要約とを虚実対照表の形に示す労作を眺めていると，不図，左側に記された実人生と右側の作品世界とが，ヴォツェックの反童話の中で子供の経巡る月や星や太陽の世界が示す遠近両景の通念と実物の対照相違にも相当するのでは

ないか，と埒もない想いに誘われるのである。

ヴェルフリの詩とヴォツェックの殺戮場面の双方の添加物たる一片の自然はそれなら，ここで虚の世界を成すのか。それは，方や途轍もない壮大な物語を紡ぎ出す元となり，方や不可解なお伽噺のあくまで実体を具えた比喩は，すなわちこれまた動かしがたい自然の片割れとして機能するのかもしれない。

註釈

*1
原文は：
Es ist Doch Gottes Wille:
Dass Glück verschwinden muss!
Und ziirpt im Wald, die Grille:
Fällt Alles in den Russ.
Hält mihr d'r Schatz, nicht stille!
Ebjä!! Ebjä!! Ebja!! Ebjä!! Ebjä!!
Weil ich, doch muss!
Ist es Doch Gottes, Wille:
Dass Glück verschwinden, muss.

*2
原文は：
MARIE
Wie der Mond rot aufgeht!
WOZZECK
Wie ein blutig Eisen!
(zieht ein Messer)
MARIE
Was zitterst?
(springt auf)
Was willst?
WOZZECK
Ich nicht, Marie! Und kein Andrer auch nicht!
(packt sie an und stösst ihr das Messer in den Hals)

MARIE
Hilfe!
(sinkt nieder. Wozzeck beugt sich über sie. Marie stirbt.)
WOZZECK
Tot!

引用・参考文献

本文中に括弧つきの略号で指示。

Wölfli, Adolf: Adolf Wölfli. Von der Wiege bis zum Grab. Oder. Durch arbeiten und schwitzen, leiden, und Drangsal bettend zum Fluch. Schriften 1908–1912. 2 Bände. Hrg. von der Adolf-Wölfli-Stiftung, Kunstmuseum Bern. Bearbeitet von Dieter Schwarz und Elka Spoerri (=vdWbzG)

Adolf Wölfli Ausstellungskatalog, Württembergischer Kunstverein, Stuttgart 1977 (=Württemberg)

Adolf Wölfli Ausstellungskatalog, Kestner-Gesellschaft Hannover 1976 (=Kestner)

Gartmann, Thomas: "Zwei Triebtäter". Zu Wolfgang Rihms Wölfli-Liedern, in: *Gegen die diktierte Aktualität. Wolfgang Rihm und die Schweiz. Für Wolfgang Rihm zum 60. Geburtstag,* hrsg. von Antonio Baldassare, Hollitzer, Wien 2012, S. 17–41. (=Gartmann)

Berg, Alban: Wozzeck. Opernlibretto.
http://www.naxos.com/education/opera_libretti.asp?pn=&char=all&composer=berg&opera=woyzeck&libretto_file=libretto.htm

（すなが・つねお　法学部教授）